

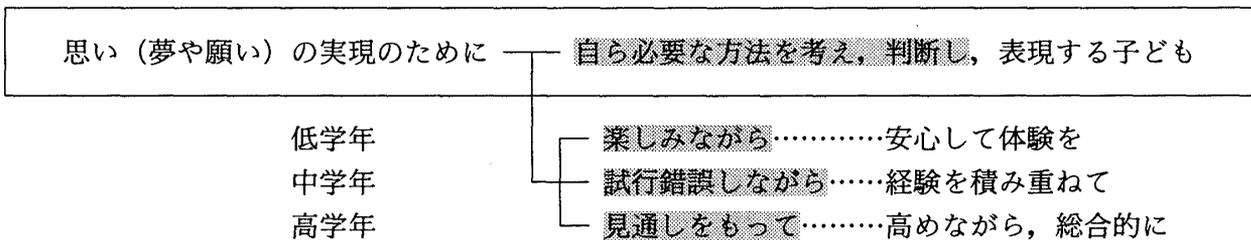
7 図画工作科

加藤潔己・阿比留時彦

1 研究テーマ「自立に向かう子どもたち」

本校が考える「自立した子どもの姿」とは、「発達段階に応じて、他との関わりの中で、自ら考え、判断し、行動できる子ども」である。ここで、子どもたちが身につける学力は、主体的思考力、課題解決能力、関わりの中で自分自身に自信を持ち、「自分らしさ」を探求していく力であると考えている。これはまた、自己確立をめざすものであり、図画工作科のめざす創造的心情の育成と目的は合致すると考える。豊かな思いを持ちながら、昨今、それをどのように表現するとよいのか、その方法を知らずに、或いは、その方法を試すような経験を十分に保証されずに成長する子どもたちが増えていると思われる。自分の思いを表現するのに多様な方法を試したり、じっくり考えたりすることや、また、それを遊びの中で培っていくなどの環境が、大人の価値観の暮らしのなかで、失われてきているのではないかと考えた。図画工作科として、このような子ども達の実態とまわりの環境を踏まえて次のように求める子ども像を構想した。

(1) 本校図画工作科としての自立に向かう子ども像



(2) サブテーマ「自分で決める場を大切に」について

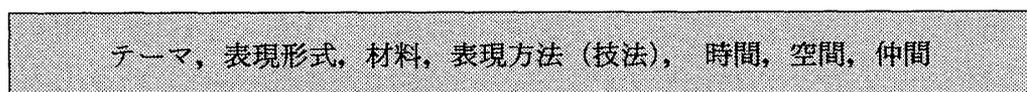
「自分で決める」からこそ、決めたことに対して本気で集中し、没頭できるものである。また、「自分で決める」からこそ、責任を負うものである。決定の動機が内発的なものであること、切実感のあるもの、そして造形的表現欲求を満たすものであることが重要であり、そうでなければ、その決定や、それに続く活動は、「自立」を育むものにはなりえないと考える。ただ「決める」のではなく、「自分の思いの実現のために、自分で決める」という決定が求められると考える。

2 研究の方向性

(1) 決定主体と教師のはたらきかけ

学習の中で自分で決める場（環境）や対象として、次のような視点を考えた。学習には、場の設定や指導などの、教師の働きかけが不可欠である。それぞれの視点での、指導者（教師）のはたらきかけと学習者（子ども）の決定の主体の度合いについて、題材ごとに設定している。

決定要素として考えたもの



(2) 新たな図画工作科教育課程の創造

子ども達の「自立」を育む上では、できるだけ子ども達が自分たちで決めていく場を保証することを重視したい。つまり決定要素をできるだけ子ども達に委ねていくというものである。ただ、こ

のような題材だけではなくて、下の表のようにねらいを焦点化した題材とのバランスを考えていくことが必要である。例えば、教師側の設定の割合が大きい題材で、子ども達が様々な造形経験をつんで行くことも不可欠なことである。

【表】	表現欲求，心の解放を主なねらいとする題材
【材】	材料経験，表現方法，表現様式の獲得を主なねらいとする題材
【相】	相互理解を主なねらいとする題材
【造】	造形的な見方・考え方の獲得を主なねらいとする題材
【知】	知識，技能，造形文化の獲得を主なねらいとする題材
【総】	学習したことを総合的に生かすことをねらいとした題材

(例) 第3学年：「みる」…見ることに中心に 「かく」…かくことに中心に 「つくる」…つくることに中心に

【60時間】

* ○の中の数字は時数を表す。

月	造形あそびの考え方をもとにして		
	みる	かく	つくる
4月		・にじみから思いを広げて④【材】	
5月			・トントントンのくぎうち遊び⑥【材】
6月	・絵の中の世界④【造】 ～パウル・クレー～	みる	
7月		活動	・きみはねん土のマジ
9月		常	シャンパートI②【表】
10月	・絵の中の世界④【造】 ～6人のピカソ～	意識	
11月		し	・きみはねん土のマジ
12月	・ぼく、わたしのすきな 絵②【知】	て	シャンパートII②【表】
1月		か	・お話しさんぽ道④【相】
2月		す	・色糸のげいじゅつ家
3月			④【材】
			・ぼくは島の王様⑥【材】
			・主役を決めて⑧【材】
			・はこの中は、ないしょ
			⑥【総】

(補)・うきうき，メイクアップ ②【表】 ・ゆめを運ぶ乗り物 ⑥【総】

この中で、「造形遊び」を方法として取り上げではなく、その基本的な考え方を基軸とし、「みる」「かく」「つくる」を方法の柱立てとする。このことは、「より子供の活動に沿った学習とは何か」を原点にしている。